



◆詩と批評◆第174号◆

2026年◆春◆季刊

◆ ◆
巻上公一 Makigami Koichi

ムハンマド・ファリッド・ハサン Muhammad Farid Hasan

ジェフリー・アングルス Jeffrey Angles

笠間直穂子 Kasama Naoko

イナン・オネル Inan Oener

樋口良澄 Higuchi Yoshizumi

新井高子 Arai Takako
◆ ◆

・本・

〈詩集〉巻上公一『眼差から帰還する』左右社(¥2970) 新刊!

ジェフリー・アングルス『わたしの日付変更線』思潮社(¥2420)

〈訳詩集〉イナン・オネル日本語訳『「ナーズム・オラトリオ」テキスト全訳』非売品

〈エッセイ集〉笠間直穂子『山影の町から』河出書房新社(¥2200)

〈追悼集〉樋口良澄編集『唐十郎 襲来!』河出書房新社(¥2640)

〈評論〉新井高子『唐十郎のせりふ——二〇〇〇年代戯曲をひらく』幻戯書房(¥3080)

・お知らせ 1・

近刊! 『唐十郎とは誰か——日本の戦後とシュルレアリスム』(仮)

著者: 唐十郎、巖谷國土、新井高子 編集: 新井高子 版元: 工作舎

・2・

近刊! 樋口良澄が、劇団唐組座長代行・役者、久保井研との対談本、

『紅テント覚醒!』(仮) を出版します。 版元: 未知谷

・3・

『ミテ』元連載者・ベオグラード大学准教授、ディヴナ・トリチコヴィッチの来日講演会!

埼玉大学特別公開授業「セルビアの「笑い」——東欧事情をふまえて」(仮) 一般聴講可、無料
7月16日(木) 13:00~14:30 於「詩歌から考える日本語表現」(担当: 新井、教養24番教室(予定))

・4・

笠間直穂子主宰、国学院大学催し「言葉を移す、文化を映す(5) 体験/記録/翻訳」が2月21日(土)に開催されました。パネラー: 田久保麻理、谷口亜沙子、ミリアン・ダルトア・赤穂、笠間。

・5・

新井高子の埼玉大学科目「戯曲から考える日本語表現」にて、1月22日(木)に、アロン・ジェロー(イエール大学教授)による特別授業「落語の魅力」(トーク+1席)が催されました。

・6・

デジタル版『日本近代文学大事典』に、新井の項目(執筆・菊地利奈)が加わりました。

・7・

『大岡信研究』第11号(大岡信研究会)に、新井がエッセイ「宇宙青へのパスポート」を寄稿しました。

・8・

新井の詩3篇がベンガル語に翻訳され、バングラの新聞『Dainik Sangbad (Daily News)』(3/5)に掲載。

・9・

新井詩集『おしらかさま綺聞』が阿世賀淳「詩人の図書館・文学ラジオ」#91, 92(YouTube等)で紹介。

・10・

『ミテ』新号は、サイト「お知らせ」欄からpdfでも読めます(半年限定)。http://www.mi-te-press.net/

【後記】巻上公一さんに詩の寄稿、ムハンマド・ファリッド・ハサンさんに提供をお願いしました。

編集: 新井高子 / 発行所: ミテ・プレス / 発行日: 2026年3月31日(火)

寄付を随時受け付けております。郵便局口座: 10090-74894051 名称)ミテノカイ

E-mail: mite@ace.ocn.ne.jp

「ソレデハミナサマ、ゴキゲンヨウ。」

雪の日に上を向いて

卷上公一

さっきの雨が
軽くなって舞い
雪だね

川崎のホームで
九ちゃんのメロディは
悲しみを遠ざけている

冬のオリンピック開幕の日に
北の地方は大雪だという
駅のホームではたぶん

大人の顔がくすぐったくて
ちっちゃな子が
きよろきよろとちらり見る
そろそろそろと電車も来る

この頃は世界のタガが外れてさ
スノーボードみたい
右も左も上も下もさかさまで

マスタートのスピードで
世の中が方向感覚をなくし
やわらかなゆき色に

ハトも心も
迷子になった

ぼくはさ

ゾンビが住む国に生まれたのかな

そんな映画がリアルに寄ってくる
ドクターノオの島を作っていたり
ぼくというぼくも複製されたりさ

さっきの雪は

息をカタチにしたような
花の酔いかもしれないな

白く 白く

白い

アナウンスは少し訛って
フェイクニュースの趣で
電車のドアが閉まっていく

網棚に忘れたポエジーを
誰かがひろうこともなく
終着駅に着いたと同時に
清掃されていくのだろう

線路は海を越えていき
線路は風を巻いていく
線路は街を愛でていき
線路は雪を蹴っていく

さっきのあの

九ちゃんの口笛だっけ

音楽は

晴れ間に似合う

雪雲の裏側にあるんだ

心身の部屋

ジェフリー・アングルス

一

意識のホテルには翼ウイングがある

普段に起きて寝るのは

メイン・ウイング
本館だがそこから

翼を広げると いつの間にか

ニュー・ウイング
新館に迷い込むだろう

いや 新旧の問題ではない

別館が最初からあったのは確かだ

ただ言葉の鍵を手取るまでは

その廊下に入れなかっただけ

階段を上がると

ウエスト・ウイング
洋室の西館から

イースト・ウイング
和室の東館が広がる

部屋は同じ間取りではないが

日本語の分厚い掛け布団にくるまり

はじめて畳の上で 眠りにつくと

蘭草の香りに包まれて なんと

いままで見たことがない

心地よい夢を見る

二

医者によると 心臓は整っていない

電報の走るケーブルに雑音があり

心房から送られる地震警報は 届かない

何も知らぬ心室に 一気に 揺れる

壁にかかった絵画は壁から落ちてきて

食器は棚から飛んで 床に粉々になる

しかし その診断は間違っているだろう
整っていないのは心臓ではなく 心である
それを何度も 経験したことがある
空港に到着しても 誰も待っていないとき
欲望に迫られて 煙に霞んだバーで
殆ど話さずに 深夜まで飲むとき

そういうとき 地震が来る
余震は 時々 何日も続く
暗い心室に 引き籠もったまま
胸を手で押さえながら 私は
血赤色の壁の揺れが終わるのを待つ
大地が また 静まり返るまで

三

体の中に部屋が もう一つできた
業者がいつ来たか 誰に頼まれたか
見当もつかない 木材を切る鋸の音も
釘を打つ金槌の音も 一切聞かなかった
でき上がるまで その存在さえ知らなかった

憩室はほんとうに 休憩のためだったら
なぜこれほど痛くて 休ませてくれないのか
土台が弱かったのか そもそも部屋を建てる
余地がなかったのか 最初から構造設計に
欠陥があったのか 今でさえ分からない

痛みなんて意外と 場所を取ってしまう
こつそりと建てた部屋だけで 満足できず
身体の廊下を歩き回り 心を囲む垣根の中に
忍び込んで住みつく だから私は立ち退きを告げ
その空間を取り返そう いまこの丸薬を飲むと

注：(一)は『現代詩手帖』二〇一一年二月号からの転載の作品で、(二)と(三)は書き下ろし。

紙つべらの四隅指ではじいてねえ、ためつ眇めつ裏と表バよぐよぐ見でねえ、香爐の前サおきましたよ、のんのんさまア。ほうして、じゃんじゃら数珠ならして、お経だか呪文だか。だって、あだシアまだ十歳で、母さんに連れらいで。金のカマボコ指輪しただけど、左の小指アねがつたよ、まる坊主ののんのんさまの。ほうして、むらさぎ色のお線香二本、合わして、ともした。ほうして、犬つころの遠吠えしながら、一本は右手、一本は左手。煙ごとゆつぐら揺らアし、輪ア描いて、一寸はなして立てました、その香爐に。母さんの目の前に。約束手形のゆく末バ、占うてもらいに来たがですよ。

「右が早けりや、手形は落ちる。左が早けりや、落ちない」。

両手バ舞アして、人さし指で、ほうツと、念力こめで、じゃんじゃらじゃんじゃら、唱イ言がはじまりました。見入っていました、母さんは、線香の火の玉に、足萎えの蟻子のような駆けつこに。

ちいと左が抜きました。それでも右が追いこしました。こつちが小風に震れエました。そつちが息つき赤らみました。

そのたンび、手えが濡れたよ、あだアしも、すすって飲んださ、鼻水も。

のんのんさまのじゃんじゃらが、線香の燃イがら崩すたび、ぎゅん、と鳴った、心臓が。

追いこして。あつちが、こつちが、呪文サ震れエで、

富山のくすりみだいな抹香バ嗅ぎながら、

右も、左も、ようわがらんで、

寝ちやつたよ、火の玉のながサ潜って。だって、

ふあんもかたちになるのを

ふあんもかたちになればなんぼかもつのを

ふあんもかたちになってなんぼかもてばとびかうのを

ふあんもかたちになってなんぼかもってぎゅんぎゅんとへば、どおりり垂れる、

母と家いべ、

飲みこんだがら。

詩人ユヌス・エムレの五篇の詩

訳 イナン・オネル

詩人ユヌス・エムレ (Yunus Emre) は一二三八年にアナトリア中央部サルキョイ村(現エスキシヒル県)に生まれ、コンヤで学び、今でいうアゼルバイジャン、イラン、イラク、シリアを旅してから地元に戻り、師タプトウク・エムレの下で修業を修め、一三二〇年にまたサルキョイ村で亡くなりました。ユヌス・エムレは、先輩のアーシユク・パシヤらと共に、当時主流であったペルシア語による詩作をさけ、あえてトルコ語で詩を作り、トルコ近現代詩につながる道を築きました。同時に「Ask」(恋)の概念を構築し、しばしば「神への愛」とみなされるが、神との、ひいては自然との一体化への強烈な欲求の情熱的な表現に至ったと言えます。これまで「ミテ」でトルコの近現代詩を訳してきましたが、今号では遙か昔の、いつてみれば生まれた頃の詩を、生みの親とされるユヌス・エムレの詩を五篇紹介します。

わたしはあなたを求める

あなたの恋はわたしをわたしから奪う　わたしはあなたを求める
夕べも今日もわたしはもう燃え尽きる　わたしはあなたを求める
わたしは富を喜ぶことはない　わたしは貧困を悲しむことはない
わたしはあなたの恋でみだされる　わたしはあなたを求める
あなたの恋は恋をするものを殺す　恋の海に潜らす
運命でそれを見なす　わたしはあなたを求める
わたしは恋の美酒を飲もう　メジュヌンになって山に登ろう
夕べも今日もあなたを想おう　わたしはあなたを求める
スーフィーたちは雑談を求める　アーヒーたちはあの世を求める
メジュヌンたちはレイリーを求める　わたしはあなたを求める
たとえわたしは殺されても　灰を空へ飛ばされても
大地にそのとき誘われても　わたしはあなたを求める
天国天国と皆がいうのは　数軒の邸宅と数人の美女をいう
求めるものにそれを与えればよい　わたしはあなたを求める
わたしの名はユヌスである　日に日にわたしの炎が増す
この世でもあの世でもわたしは求める　わたしはあなたを求める

恋が訪れればすべての不足がみだされる

何がおきようと放っておいておきてしまえばよい
ただ心が主を見つければ何があってもよい
恋の海がまた溢れて血のように流れる
手立てなく恋するものは潜ればよい
この海に落ちたものは死ぬと言われるが
死ねば死のうと放っておいて死ねばよい
恋が訪れるとすべての不足がみだされる
みだされなければ放っておいて残ればよい
いづれこの目も土でいっばいになる
いっばいになるなら放っておいてなればよい
世界の富と名譽をユヌスは放っておいたから
もらうものがいればもらっておけばよい

あなたです わたしの命の命

あなたです わたしの命の命 あなたがいなくては定まりません
天国にあなたがいないければ 本当に見向きもしません
目を向ければ見えるのはあなたです 語ってみればわたしの言葉はあなたです
あなたを見つめること以外に 何一つわたしは仕事がありません
何故ならわたしはわたしを忘れ あなたの方に向かって行ったからです
いかなる状態でもであつても いつだつて安定することがありません
もしジルジスのように あなたに七〇回殺されても
また戻つてあなたのところへ参ろう とつくに恥じらいがありません
ユヌスはあなたに恋をしています どうかお顔をお見せくださいませ
わたしには友だつてあなたです あなたのほかに恋人はいません

恋のない心はまるで石のよう

聴いてくれ友よ 恋はまるで太陽のようだ
恋のない心は まるで石のようだ
石の心で何が生えよう 口から出るのも毒のようだ
柔らかく語ろうと 言葉がいわば戦のようだ
恋があれば心燃え 柔らかくまるで蛾のようだ
石の心は黒ずんで 厳しくまるで冬のようだ
あの王の門前で あの聖なる場で
恋する者の星は いつも騒ぐようだ
さあユヌスよ 不安をやめよう この笛よりも
先に男は恋が必要だ だからこそ修行僧と言えよう

裸になつて道に入れ

幾人もこの世で罪を洗えない
一生が無駄に過ぎてても同情を覚えることがない
幾人も無知に眼を結ばれて
神のためにと一枚のナンすら惜しんで上げない
この世は嫁だ 緑と赤を飾る
人は新しい嫁を見て見飽きない
幾つものライオンを奪つて去るぞ 死は
死神のかぎ爪に耐えることがない
さあユヌスよ 裸になつて道に入れ
百人の武者がきても裸から何も奪えない

*メジュヌン…民話の主人公でレイリーに実らぬ恋をしたことで知られる。レイリー…民話上の主人公でメジュヌンに恋されたことと知られる。スーフィー…スーフイズムとも呼ばれるイスラム神秘主義の信者。アーヒー…一二世紀頃アナトリア中央部で発祥の職人組織。ジルジス…四世紀頃ローマに棄教を迫られたが、受け入れず殉教者となった聖ジョージ(ゲオルギオス)のこと。

【詩のたより——バングラデシユ】

顔、その他一篇

ムハンマド・ファリッド・ハサン

訳 新井高子

顔

そもそもわたしは一人じゃない
見ればわかるだろう
わたしが笑うときの声と声色
泣くときも、数えきれない人々が
さまよっている、まわりで
世界のすべての片隅で

ここでわたしは詩を書いているが
アマゾンの森深くで
蛇やかげといっしょに
原始の暮らしをする或る人は
顔も眼も髪の毛も、双子のようにそっくりじゃないか、
わたしと

あるいは、或る日、ピラミッドの中の
ミイラの干からびた顔が
わたしに微笑んだ、わたしを深く抱きしめた、
きみの兄弟、ツタンカーメンだよ、と
数多の人々がわたしから顔を奪ったが、
つい昨日でさえ、もつとも古い想像の星へまい戻った、
わたしは、気が狂ってさまよって
荒地のそこかしこに行った
じぶんのようなだれかが
すでに禁断の実を食べたあとだと知るために

わたしのすべての顔をとり戻したい
過ぎ去った昼と夜をとり戻したい
わたしの顔にそっくりな数えきれないすべての人に、い
まだに会う
彼らは道を歩いてくる
時のはじまりからおわりへ
彼らは歩き続けている……ずっと歩き続けている……

ウソつき募集中

ウソつきは法律で任命されるのさ
出生届なんかない野雁がグアグアわめき立てるように
毎日わんさとウソをつき
正直者の顔に灰をまき散らす
この地域はウソという魔術で征服されるだろう
折り目正しい男たちは負かされてしまおうだろう
豚のように純朴なウソつき
緊急でその大募集なのだ

興味があるウソつきは醜悪な写真付きで応募できる
急ぎなさい、時間がない
給料はこれっぽちも心配するな
二〇でも三〇でも四〇でも、ダイヤでも真珠でも、
だれがなにが要る？
家も、車も、ワインも、女も、だれがなにが欲しい？
気前よく提供されるさ
でも、そのかわり、生まれながらのウソつきじゃなきゃ
ダメだ
ことばに私利私欲がなく、グアグアわめき立てるあの野
雁のように

*著者 ムハンマド・ファリッド・ハサンについて

Muhammad Farid Hasan (মুহাম্মদ ফারিদ হাসান)

一九九二年、バングラデシユのチャンドプル生まれ。詩人、
著述家。バングラデシユとインドで三三冊の本を出版。バンダ
ラデシユの若い著述家にとって最高の榮譽である「カリ・オ・
カラム若手詩人・文筆家賞2024」を、エッセイ・研究部門で
受賞。

昨秋、当地の有力紙『Daily Janakantah』に、拙詩「朝をく
ださい」のベンガル語訳が掲載されるに当たって知り合った。
この和訳は、「顔」は Purabi Basu による英訳、「ウソつき募集
中」は Jahid Nayon による英訳から試みた。

(新井)

杉生の周辺

笠間直穂子

机の前にある窓から、荒川対岸の段丘を覆う雑木林が見える。いまは、葉のない落葉広葉樹群が灰色の霧のように斜面をつつみ、合間に針葉樹が赤茶色と暗緑色の黒っぽい影を落とっている。もう少しすると、灰色のところどころに山桜の小さな白い雲が湧き、その後、落葉樹の部分は優しい若葉色に染まって、他方、スギやヒノキは濃い緑色をした細長い円錐の集合になっていく。

林業の盛んな地域に暮らすようになったので、人工林の間伐を見学させてもらった。広葉樹林の再生と地域特産物の開発を両立させる事業に取り組む知人がいたり、木々は身近にある。といっても、山林を親しく感じるのは、はじめてではない。

わたしの母方の曾祖父は、宮崎の木材商だった。国内の木材生産が活況を呈した戦前から戦後しばらくのあいだまで、ずいぶん羽振りがよかったようだ。しかしその後、二度の火事で、まず製材所、次に家が全焼し、家が焼けて間もなく亡くなった。そのころには、すでに国産材市場も低迷していたはずで、家はじきに木材事業から手を引いた。

曾祖父母には子がなかったため、付き合いのあった愛媛の同業者の娘を養女に迎え、その養女が婿をとって、家を継いだ。これがわたしの祖父母にあたるので、だれの血を引いたか、引かないか、というようなことはともかく、自分は九州だけでなく、四国の林業の世界とも縁がある、と思っ

たぶん二十年以上前になるが、本家に長くしまつてあった衣装類を伯母たちが整理した際、わたしが古いものを好むから、というので、曾祖父の遺品がいくつか手元へ来た。バナマ帽、ベスト、そして、ウサギの毛だろうか、着脱できる手製の毛皮の衿をつけた、黒いウール地のコート。明治のひとつにしては大柄で、わたしには袖があまるのだけど、たまたまに着る。ある日、内ポケットに一枚の切符が入っているのを見つけた。

日付は、21.12.11.のようだが、スタンプがかすれて見づらい。よく見ると、最初は24のようでもある。昭和二十一年、または二十四年の、十二月十一日。日向大東より門司港ゆき、通用四日、五二〇円、二等。『門司港と門司税関の軌跡』(門司税関・門司税関百周年記念誌編集委員会編)によれば、敗戦直後の門司港は連合国軍の完全統治下に入り、貿易再開は昭和二十四年だという。切符の数字が24とすれば、ぴったり合う。

毛皮の衿のコートを着て、三等車で九州を北上する、事業再開に張り切る木材商の姿を想像してみる。もうすぐ、彼は好景気に乗って、木を売ることで戦前に勝る利益を得るだろう。そして、得たものは大方、焼きつくされるだろう。

*

大原富枝は、高知の北部、四国山地に位置する本山の出身で、初期には林業にまつわる作品をいくつか書いている。林業はまた、彼女自身の転機にも深くかかわった。

太平洋戦争がはじまって間もなく、彼女は故郷を出て、単身、東京へ居を移した。恋人に捨てられ、文筆で生きようと決意しての上京だが、もうひとつ、帰らなかった、あるいは帰れなくなった理由がある。父が山林売買に手を出して、失敗し、瞬く間に全財産を失ったのだ。母は早くに亡くなり、父と姉が結核の富枝を支える三人家族だったが、姉が大阪へ嫁ぎ、富枝が東京へ移った上に、実家は人手に渡って、父は県内の親戚宅に引き取られ、一家は散りぢりになった。

一九四三年発表、のち『女心更衣』(一九四七年)に収められる短篇小説「鎌倉・日光」は、父が、東京に暮らす「私」のもとを訪れた際のことを書いたもの。ほぼ作者自身の直近の実体験に沿った作品と考えられる(以下、引用は新字新かなに直す)。

東京駅に着いた父は、「私」の目にひどく小さく見える。元々、小学校教員として本山に赴任してきた父は、漢学に親しみ、植物や虫の音を愛し、雨が降れば一日中手習いをするような物静かな男だ。ところが、たまたま、誘われるまま怪しげな話に乗ってしまう一面がある。

娘が二か月ほど上京しているあいだに、父はそれまで管理だけを請け負っていた植林の山を、無理して高値で買った。木を伐り出して売れば儲けが出るはずだったが、ブローカーの目が狂い、売値は買値に遠くおよばなかった。自分たちの仕事を「一にも二にも嘘と駆け引き」と自ら認める木材商たちのあいだでは、父の件が最初から仕組まれたものと噂されていることを、娘は知人から伝え聞く。

しかし、やけに威勢がよくて、粗忽なところがあるブローカーのことを、父も娘も、恨んではいけない。父はあくまで自分の見込み違いを責めて、ブローカーをかばい、娘は、呆れるばかりの成りゆきに、失笑するほかない、という気持ちでいる。

すっかり頼りない様子になって東京へやってきた父を、娘は鎌倉へ、次いで日光へ連れて行く。歴史に詳しい父は、往時を偲ばせる鎌倉の町を楽しむ一方、日光東照宮の派手派手しきには食傷し、最後まで見ようとせず、「もう帰ろう!」と引き返してしまう。

けれども、二荒神社まで下りたところで、日光山を振り返った父は、「おお！」と小さく声をあげて立ち止まる。

——そこに日光山の斜面の杉生が、近々とその太い幹を見せながら、然も渾然とした遠い林相で曇り日の空の下に大和絵のように深く厚ぼったりして浮び出ているのである。

老父は黒い蝙蝠傘を肩にかついでまま、

「見事じゃよ！」

と語尾を引いた。——全く美しかった。立派であった。

「全く父ぐらい山を愛している人間は少ないだろう、父ほど植林を好きな人間はたくさんはいないであろう」。父は「若い雌鹿のようにすんなりとした檜の純林を」、また「間伐のあとの、あたりを払って伸びのびとたてがみを振るって新らしい呼吸をしているあらゆる美しい若駒のような杉の植林を」愛しんできたのだと、娘は思う。

やすやすと身ぐるみ剥かれるくらいだから、山の商売に明るいわけではない。元来の父は、欲のために山に関心を寄せていたわけではなく、ただ美しく植えられ、育っていく木々の姿が、心から好きなのだ。振り返りざま植林の山を目にした父の、あくどい商売の痛手を凌駕する、純粋な賛嘆のまなざしに、胸を打たれた。

*

そのころの、まだ駆け出しだった大原富枝は、秩父地域出身の作家、大谷藤子の書くものに「絶対の尊敬を捧げていた」。大谷は、大原より十一歳年上の一九〇一年生まれ。現在は小鹿野町に属する両神に育ち、結婚して五年ほど呉に暮らしたのち、離婚、上京。『改造』の懸賞小説に女性初となる入選を果たした。山深い村の生活者たちを、内側から、削ぎ落とした筆致で描いた短篇小説群を残しているが、そのひとつ、一九三九年発表の「山村の女達」に、重要なモチーフとして、植林が出てくる。

秋の畑仕事にいそむ村人たちは、いつもは冬の農閑期に入ってから東京の息子宅へ出かけるおせいさんが、風呂敷包みを背負って身を隠すように遠くを歩いていくのを認める。せいになにかあったのかと噂し合うところへ、事情通のもよが口を出す……。

つづく記述は、もよの話、せいの内面、村の生活のあり方、などを行き来しつつ、当地の女性たちが共通してかかえる不安を描き出す。働くことが求められる百姓の暮らしのなかで、年老いた女性は家のなかで居場所を失うのだ。せいは息子が二人とも家を出てしまい、代わりに入って家を引き

継いだ親戚の若夫婦に気兼ねして、馴染んだ家に居づらくなる。気の強いもよは、役立たずの年寄りと思われたくないばかりに、息子を抑えつける。

そのなかで、たみという女性に、徐々に焦点が絞られていく。たみは、夫を病気で失い、一人で娘を育てているが、夫の死後、彼に庶子がいたこと、その息子が法律上の後継ぎとなることを知った。家が見も知らぬ子供のものになるという理不尽に呆然としつつ、たみは他方で、せいの相談相手となる。せいは家を出て、たみのもとへ身を寄せせる。

たみは、よその土地の生まれで、生家は杉山の植林をもっていた。嫁いできたこの地では、だれもが田畑に熱中して、杉山をつくらないが、たみは充分に杉が育つ環境だと見てとり、自ら苗を植えはじめた。最初は「女の仕事ではないよいうな気が」したけれど、三代先にやっと収入が見込めるような仕事に、だれも手を出さない以上、自分がやらなければ一代遅れると思いい、決心したのだ。

杉山へ下刈りに行った日、作業を終えて、たみは山のなかに行む。

今、たみは静かに見わたしながら、何十年か先のことを想っている。こゝが小暗く繁り、この杉たちが頭の上高く見あげるようになって、こんな下刈りの日のことなどは夢となる。恐ろしいほど深い山になるときがくる。

そう考えるたみの胸には「深い飲みが湧く。自分の知らない未来のだれかが受けるだろう賞賛を思い浮かべ、杉の匂いの立ちこめる静かな山を歩く。「たみは、この若杉が好きなのであった。伸びて行くのが好きなのであった」。そして、一本の幼い杉に目を留めた彼女は、自分の子ではなくても、死んだ夫の息子を、やはり引き取ってやろう、と思う。独り身で、「男まさり」で、畑よりも植林に熱心なたみは、村人たちの輪から、はみ出した位置にいる。ゆえに、家を追われたせいは、彼女を頼る。植林は、彼女が性差の境界を踏み越え、自分の一生よりも遠くを見通す存在であることを象徴する意味合いをもつ。

「鎌倉・日光」の父も、「山村の女達」のたみも、山林売買の世界を動かす男たちの人物像とは、だいぶ違う。むしろ大きな力に翻弄される側の、「嘘と駆け引き」を知らない一人の老人、一人の中年女性であり、だからこそ、木々を慈しむ彼らの視線の健やかさは際立つ。木を植えながら、寄り添わない老女や子供の身柄を引き受けるたみの身ぶりは、森が、だれかを出し抜くための場所ではなく、だれもを迎えられる場所となる可能性を、示してはいないだろうか。

直接対話

樋口良澄

唐が寺山の追悼文を書く七年前の一九七六年に二人は対談している（「劇場」一九七六年三月）。実は二人は、唐が一九六七年に寺山のことを「文化的スキャンダルリストへ」という文章で批判して以来、方向を違え、この対談は久々の活字に残る対面だった。ただ、両者は互いの動きを無視しているわけではなかった。私がこの連載で何度か書いたように、寺山は「状況劇場新聞」に、唐の作品についての文章をこの間何度も寄稿している。二人の直接対話への水位は高まっていたのではないだろうか。

この前年、寺山は東京・杉並区一帯で同時多発的に三〇時間にもわたって住民を巻き込んで行う『市街劇ノック』を執行している。「あなたの平穩無事とは一体何なのか」と問い、日常に切り込む試みで、街頭や駅、風呂屋などで突然演劇が始まったり、住民の家をノックし侵入し、芝居を行ったりという、大胆な試みだった。住民から通報されパトカーが出勤するなど、「事件」となったが、寺山はこれも含めて「市街劇」と考えていたようだった。映画『田園バラ演劇祭』では寺山修司特集を行い、その招きで渡英するなど充実した年だった。

一方、唐も七三年に『風の又三郎』のシリア・パレスチナ公演を行い、翌七四年には蜷川幸雄演出で『滝の白糸』がジュリー出演で公演され、さらに七五年にはシナリオ・監督の『任侠外伝・玄界灘』が公開、また責任編集の雑誌『月下の一群』が刊行されるなど、これまた充実した時期だった。

寺山が市街劇という、新たな次元に表現を一步進めると同様、唐もアジアの旅を経て、映画に、雑誌メディアに、新たな挑戦が始まっていた。期は熟したのだろうか。二人をずっと追跡していた当時演劇記者の扇田明彦の司会で対談「肉体論 棺桶は舟であるかないか」は行われた。

しかし、実際対談を行ってみると、司会の扇田昭彦が立ち往生するくらい二人はかみ合わなかった。

結果的にお互いがお互いのこだわりから外へ出られず、ダイアログが成立しなかったのだ。寺山は、唐について「文学的思考」、「自分の内面を信じすぎている」と評し、自分は文学から離れて市街劇、歴史をも演劇と考えるような視点から考えていると批判する。確かにこの当時、密室劇、書簡演劇など様々な試みを続けていた寺山にとって、演劇は方法めいたものになっていた。唐の演劇が、内面性に関わる「文学」であると言い切ってしまったのだろうか。

だが唐も負けてはいない。寺山の市街劇を批判し、「僕は日常というのはうんざりだ。街に出たって何もないと思うよ」と返す。唐にとっては、内的現実／非現実と切り離された外の「市街」からは、何も創造的なものは見出せなかった。寺山には、それが唐の「文学的思考」と映るのだろう。

今読むと寺山の言は、いささかコンセプトが先立っているように思う。この当時の寺山は身体や内面を離れて、コンセプトだけで、演劇を、人間をどこまでも拡張しえると思っていたはずだ。そしてそのように走った。そこには、数年後に「言葉」を主張する谷川俊太郎に、肌ぬぎになって病変した背中 of 皮膚を見せた、言葉に実存で応答した寺山はまだいない（一九八二年 谷川とのビデオ往復書簡『ビデオ・レター』、現在の発行元はアートデイズ）。

寺山は「状況劇場の演劇は、これから観客にもメーカーキャップさせるべきだ。一つのロマンの中に客も風景も全部たぐり込んでしまいうんだが、客だけはロマンの外で観察者になっている」と挑発する。観客もメイクするという提案は、『ノック』で観客が勝手に衣装を変えて参加したことを思い出しているのだろうか。唐は「観客にメイクさせるんだったら、観客を全部蠟人形にしたいねえ」と応じる。「その中に一人だけ血の通った観客がいるとかね」。

「たぐり込んでしまう」ことの唐にとつてのありようは、観客が蠟人形となってしまうこと。このイメージこそ、唐にとつての「内部」の現実だった。それは彼が寺山の死を描いた『ジャガーの眼』に登場する人形「サラマンダ」につながって行ったのかもしれない。

山姥という万華鏡

——謡曲「安達原／黒塚」の巻(二)

新井高子

五来重「鬼むかし」から描く安達ヶ原

前回のノートで、五来重『鬼むかし』——昔話の世界』(角川文庫、二〇二二年)がとらえる「安達ヶ原」をとり上げた。改めてまとめるならば、五来は、福島県その地にとり上げられた限定するのではなく、平安時代まではどこにでもあった「あだし原＝化野」、すなわち風葬の地として安達ヶ原をとらえ、そこに散乱する死骸から、餓鬼、すなわち死霊の姿を謡曲の鬼女に重ねた。五来は、「安達ヶ原に鬼女が居るといふ昔話の根源は、「あだし原」に死霊が彷徨していて、そこを通る者に取り憑いて害するという恐怖観念にはかならない。この霊魂観念と恐怖観念が「鬼一口」といふ昔話のモチーフを生んだ」(五〇頁)と記す。

その上で、なぜ死霊が鬼女として表現されやすいか、女なのかについては、死後に霊魂が麓の里から山中他界へ行くという宗教観念のもと、その霊の始祖が一面では子孫を慈しみ、一面では厳しく戒めると信じられたことなどから女性性と結び付き、懲戒の恐怖性のほうが人喰い鬼へ発展したのではないかと説く。

さらに日本のシャーマン、梓巫女(あずさみこ)やイタコからも五来はこれを説明する。女巫には死者の霊が憑きやすいことから、謡曲の鬼女にはその姿も影響しているのではないかと述べるのである。

ここで彼が引用した和歌が興味深い。『古今集』(巻二十)には、「神あそびのうた」として梓巫女が梓弓(あずさゆみ)を鳴らして死者の霊をよび寄せる歌がこのようにあるという。

「みちのくの 安達の真弓 わがひかば

すゑさえ寄り来(こ) し(の)び(く)に」(五一―二頁)

(試訳・陸奥の安達の檀(まゆみ)で作った弓を、わたしが引いて鳴らしたら、のちのちまで寄って来ておくれ、こっそりし(の)んで)

さらに、この古型として宮廷の神楽歌も引用し、

「みちのくの 梓の真弓 わがひかば

やうく寄り来 忍びく(こ)に」(五二頁)

(試訳・陸奥の梓弓を、わたしが引いて鳴らしたら、だんだん寄って来ておくれ、こっそりし(の)んで)

じつは折しも先日、わたしはDVD『小沢昭一の新・日本の放浪芸』^二で、梓巫女の間山タカが、依頼者(小沢)の死んだ

一 鬼が一口で人間を食い殺すこと。

二 日本ビクター、二〇〇一年

三 柳田國男『柳田國男全集 第二巻』(筑摩書房、一九九七年)所収。『山島民譚集』は、第一集(一九一四(大正三)年刊)を出版して

親を呼びだす様子を見たばかりだ。たしかに間山はまず弓を鳴らしながら、声をはり上げて歌を歌った。それも死者の呼び出したったろう。そうして憑依すると、小沢の手を握って特別な抑揚で死人のこぼを伝えたのである。

つまり、死霊すなわち鬼が、巫女すなわち女にのり移るふるまいが、鬼と女の一体化をもたらしたし、安達ヶ原に鬼女が棲むというヴィジョンをもたらしたと五来はとらえる。

思えば、しばらく前に恐山を訪ねたことがあった。例大祭の日ではなかったからイタコはおらず、それどころか、時間さえぎりぎりだったので、わたしたち一行のほかに来場者はなく、地獄めぐりの荒涼とした岩庭を寒々と歩き回った。

いま、五来重の本を手にしながらい出すと、地獄というよりも風葬地の名残のように恐山が感じられてくる(いや、じつは地獄のほうがむしろその名残か)。かの昔、死骸が転がった鳥野辺にも、むろん、霊降ろしをする巫女はいたことだろう。恐山のイタコが簡素な小屋がけのなかで口寄せをしているように、そこにもそんな倉場があつて、その巫女の形相たるや、凄まじくないはずが……。――

謡曲『安達原／黒塚』のうしろ側を、こんな記憶と想像を含めてひとまずまとめておきたい。五来の論考から見えてくるのは、風葬と死霊の場としてある安達ヶ原、そこで鬼女と言っているほど凄絶な形相で口寄せをする巫女の姿である。

柳田國男と謡曲「安達原／黒塚」

さて、柳田國男がこの領域で多くのしごとをしているのは、むろん言うまでもない。その著書『山島民譚集(二)』^三には、謡曲『安達原／黒塚』を踏まえつつ、このような言及がある。

「姥屋敷^四の生活の有様を想像すると、吾人はマクベスの悲劇などに現はれたウィチのことに考へ及ばずには居られぬ。山野の異草に取交せて色々の生物の毛や脳(なづき)など煮たり、夜は箒に騎つて烟出しから飛出して星月夜の空を往来したり、彼国の巫女は中々の離れ業をする。此ほどでは無いか知らぬが我邦の姥屋敷の中も幽鬱なものであつたらうかと思ふ」(『柳田國男全集2』五五三頁)

柳田による西洋の魔女描写が愉快だが、まずは、それと日本の巫女を繋げた。その上で、

「総じて賢明なる老婦人は気味の好くないものである。況や巫女には術が有る。或は眼の光が鋭く或は妙にこくくと笑つてあまり物を言はない。斯うなると何をするか知れぬと云ふ不安心が生ずる。困る時は是非なく祈禱を頼むものゝ常には怖しいものだ」と云ふ感を去ることが出来ぬ。従つて姥屋敷に関する荒唐な伝説も発生することに為つたのであらう。浅草観音の絵馬に残つて居る一つ屋の物語なども一概に安達

から続編も準備されたが、生前は第二集、第三集は未刊だった。

四 『山島民譚集』の姥屋敷は、巫女の屋敷ととらえられている。

五 浅草寺周辺が浅柔ヶ原と呼ばれる原野だった頃、一軒だけあるあばら屋に棲む老女が、旅人に宿を貸し、石枕で叩いて殺して金品を奪っていた話。たしかにこの謡曲とほとんど同じだ。

ケ原の引移しとしてふふことはならぬ。黒塚の謡曲とても彼の兼盛^六が一首の歌からは到底あれほどの想を構ふことが出来なからうと考へる。必ずや当時俱通して居た鬼婆の話を取入れて所謂格調上の趣味を添へたものであらう。」

(『全集2』五五三〜四頁)

柳田は、一般民衆にとつて巫女の賢さや呪術的ふるまいはむしろ不安の源でもあったために荒唐な伝説も生まれたこと、謡曲『安達原／黒塚』には兼盛の和歌のみならず、当時広く流通していた鬼婆の話が取り入れられて成立したらしいこと、そこに能としての格調が加えられて成立したであろうことを述べている。民間伝承の視点から謡曲をとらえたいという拙考の方針に後押しをもらった気もする。

それでは、柳田が鬼婆、山姥をどう描いているかと言えば、むろん、ささやかな力量では追いかけるほど多岐に渡る。著作の質によつて角度を変えて論じているとも感じる。そこで、今回は『山の人生』^七に絞る、そこに描かれる老婆像などから謡曲『安達原／黒塚』の風景を模索してみたい。

人口に膾炙した『遠野物語』がまさしくそうだが、伝説や昔話の類い、つまり伝承のくり返しなどによつてどちらかという想像性が高まった話と、噂や風聞やしばらく前に起こった出来事の類い、どちらかというと事件性や事実性が高そうに語られる話を、柳田國男は総合して考える。五来重が前者、伝説や昔話に限りながら考察していることと比較すると、大きな特徴と言つていい。そして『山の人生』は、その後者、事実性のほうをより重視した著作だと思ふ。すると、五来とはまた異なる「安達ケ原」が見えてきそうだ。

柳田國男「山の人生」から描く安達ケ原

(一) 山に入る女

大正末に刊行された『山の人生』は、サンカやテンバと呼ばれた山の民の話などから始まる。

穀物耕作や家畜に頼らない彼らは、山野の鳥や魚を捕らえ、木の芽や草の根を食べ、衣服は裸同然か、木の葉などを綴つて着て、寒くなれば小さな獣の皮を用いたという。また特定の住居を持たず、移動生活をしたという。柳田は狩猟を生業にするマタギとも分けて考えているが、この書をものした大正期においても、少数であれそのような民が存在することを事例を挙げて綴る。つまり、山姥や山爺、山女や山男などの「山人」は実在すると記すのである。そうしてそれは、耕作技術や各種の道具を用いずとも人間は山中で生存し得ることを示唆し、のちの展開を導いていく。

女の場合は、ことに産後に発狂し、村の生活から遁走して山中に入った事件や噂が各地にあることが示される。そこで柳田は産後であることを重視して、神の子を孕む山女の伝承

八とも繋げつつ、こう記す。

「羽後の田代嶽^九に駆け込んだと云ふ北秋田の村の娘は、其前から口癖のやうに、山の神様の処へお嫁入りするのだと、謂つて居たさうである。古来多くの新米の山姥、即ち是から自分が述べたいと思ふ山中の狂女の中には、何か今尚不明なる原因から、斯ういふ錯覚を起して、欣然として自ら進んで、斯んな生活に入つた者が多かつたらしいのである。」

(『柳田國男全集3』四九七頁)

娘たちは神との婚姻のために嬉々として狂い、山入りしたというのだ。「新米の山姥」という表現にも注目したいが、そのような女が山中生活を続けることで山姥になつていくと本書の柳田は考えている。そうして、そうした狂女の存在が大正当時でさえなお聞こえてくるということは、山の蛇や猿に嫁入りする昔話がえんえんと語り継がれてきたことと繋がるに違いないとも仄めかす。いわゆる「おはなし」の次元に昔話を留めない視点が面白い。

さらに、このような狂女のふるまいは、じつは迷子になりがちな子どもたち、柳田じしんの幼少体験も踏まえた子ども「神隠し」と通底していると記す。

じつはわたしじしんも、五歳くらいとき、幼い足ではなかなか行き着けない場所ので、親戚のお姉さんに見つけてもらつて驚かれたのだった。どうしてそんなに歩けたか、そのときもいまもじぶんにも問うてもわからないが、道行きが畑の畦道だったからよかつたものの、山中へ潜り込んだなら山童になつてしまつたかもしれない……。

『遠野物語』で有名な「寒戸の婆」も、するとたんなる絵空事、まつたき他人事とは思えない。ふと山中へ入つてしまつた狂女が、生き長らえて久しいのち、変わり果てた姿で人里に現れてほどなく去ることもまた、むろん珍事であれ、人間営為の一つとしてじつはえんえんとくり返されてきた。柳田はそう書きたいのである。人間の野生が十全に発露したなら、山で生きつづけるのは不可能ではないのだから。謡曲が作られた中世であれば、そういう者の数もなおさらであつたらう。能『蟬丸』に登場する「逆髪」がまさしくそのような人物ではないか。

つまり、『山の人生』は、安達ケ原の鬼女、その老婆に、このような山人的狂女の影をも重ねられることを教える。

(二) 老いた女

ここで老女の年輪、なにをもつて長命と判断するかの柳田考察がまたじつに興味深い。

たとえば不老長寿とも信じられた尼僧、若狭の小浜にその有名な社がある「八百比丘尼」を例にしてこのように記す。

「北国は申すに及ばず、東は関東の各地から、西は中国四国

^六 平兼盛の和歌が謡曲のきつかけの一つであつたことは、前回のノートに記した。

^七 『柳田國男全集 第三巻』(筑摩書房、一九九七年)所収。「山の人生」初版は郷土研究社、一九二六(大正一五年)刊。

^八 金太郎を孕んだ足柄山の山姥などを想起してもいいと思ふ。
^九 秋田県大館市にある山、田代岳(たしろだけ)。

の方々の田舎に、此尼が巡遊したと伝ふる故跡は数多く、(中略)つまりは霊怪なる宗教婦人が、曾て巡回をして来たことはあつたので、其特色は驚くべき高齢を称しつゝ、しかも顔色の若々しかつた点にあつた」(『全集3』五二二頁)

実在する八百比丘尼は、熊野比丘尼らと同様に各地を渡り歩いた女性宗教者たちのことであつた。彼女らには、人魚の肉を食べたがゆえにいつまでも若々しいという伝説が一方にあつたにせよ、かの昔は、年月の数だけが長寿を示したのではなかつたことを、そうして柳田は説いていく。結論の一言を先に引用するならば、

「結局目に立つのは常に源平の合戦を知つて居ることが、長命の証拠になつた」(『全集3』五一七頁)

つまり、義経や弁慶、平家没落の有様をまざまざと語ることでできたならば、その人物は長く生きた者だと判断されたというのだ。どういふことか、詳しく見ていこう。

「然らば何か我々の想像し得ない方法が、之(新井註、長命)を証明して居たのかも知れぬが、何にしても平家物語や義経記の非常な普及が、始めて普通人に年代の智識と、回顧趣味とを鼓吹したのはほぼ此時代(新井註、中世後期)だ」

(『全集3』五二二―四頁)

中世が遍歴する芸能民の時代であつたことは網野善彦らの著作でも読んできたが、そのとき、琵琶法師や警女などによって平家物語や義経記が語られたことで、登場人物と彼らが巻き起こした出来事は列島各地に広まつた。たしかにそれは、昔話のような「あるとき、あるところに」という不特定の時空ではない。壇ノ浦の戦いも義経の弓流しも、歴史的事件だ。ゆえにそれによって、文字を知らない一般庶民にも「年代」歴史的「時間」なるものが普及し、それを回顧する発想も助長されたという。つまり、列島に共通の歴史意識がこのとき生まれかけた。

そして、その源平語りを八百比丘尼も担つていたというのである。

「比丘尼の昔語りは諸国巡歴の為に、大なる武器であつたことと思ふ。たゞ自分たちの想像では、単なる作り事では是迄に人は欺き得ない。或は尼自身も特殊の心理から、自分が其様な古い嬭であることを信じ、まのあたり義経弁慶一行の北国通過を、見て居たやうにも感じて居た故に、其の言ふことが強い印象と為つたのでは無からうか」

(『全集3』五一四頁)

つまり八百比丘尼たちは、現在の価値観からすればじつは高齢ではなかつた。だが、あたかも実地で見聞したかのよう

一〇 語りの文末、助動詞の問題もそこで働いたことだろう。芸能民の特権性とも関わるに違いないこの深い問題は改めて考える。

一一 幼い頃、実家の織物工場では、女たちが「苦勞自慢」、誰が最も苦勞したかを言い合つていた。それとも繋がつているだろう。

一二 この「しずめ」には、静御前の舞歌「しづやしづしずのおだまき……」が関わりと後掲の「謡曲集 上」(七〇頁)の註にある。

に生き生きと、義経弁慶が都落ちしていく様子を語ることでできたがために、また、本人たちもそのように信じ込んで語つていたがゆえに、数百年前を知る「何百歳もの老女」と人々にみなされた柳田は説くのだ。

なんと奥深い考察であろうか。たいていの民衆に識字能力が乏しく、彼らの間では戸籍も日記も発達していなかつた時代には、相手が何歳か、おのれがいくつかは、周囲も本人でさえも、現在のような正確な数の勘定で至れるものではなかつた。それが必要でもなかつた。

むしろ何を体験したか、何を見聞きしたかが重要で、その知見が「年齢」を決めていた。ある地域に限定すれば津波や飢饉や噴火が大事なそれに該当したに違いないが、琵琶法師や比丘尼たちの活躍によって、歴史語りのヒーロー、ヒロインが中世の日本列島に浸透すると、源平合戦が普遍的な節目になつた。すると、数百年前のその出来事がありありと伝えられるならば、その語り能力が高齢の証しになつた。かえすがえすも深妙である一〇。

そして思う。たとえば、岩手県大船渡市でわたしは百歳の老媪に出会つた。津波を三度経験した話を聞き、感服した。が、じつはそもそも「百歳だから」ではないのだ。その三度をまざまざ聞かせることができるから、格段の人物なのだ。もともとは、人間の「含蓄」こそが年齢と重んじられてきたと気づく二。

(三) 老いた山女

さらに柳田は、「山女が、山に入つて数百年を経たと人に語つたといふのも、必ずしも作り話では無い」(『全集3』五一四頁)と記す。そのとき「時」は、体験の厚みや思い入れや語りの悠久さで伸縮する。謡曲にはその靈妙さを伝える「山姥」という作品もあるが、かの人こそ、まさに並外れた含蓄の持ち主であつた。

ここで『安達原／黒塚』に立ち返ると、謎の一つを解いてもらえた気がする。この謡曲では、後シテで鬼婆に変ずる媪は、前シテでは麻糸を績む身分の低い女、賤女(しずめ)三として登場する。そして、陸奥の荒れ野原のあばら屋で、まるで唐突にも、雅びな源氏物語を引きながら自分語りをはじめ。わたしはなんとなくその場面が腑に落ちずにいた。

詳述してみよう。宿を借りた僧は、老女の手もとに注目する。すると、これは「梓杵輪(わくかせわ)」という賤しい女が使う道具だと応え、その糸繰り車を回しながら三、むだに重ねてしまつたおのれのいのちを憂いつつ、長々と語り出す。

麻やカジによる織維「倭文(しずり)」とも関係することだろう。

三 山姥は麻糸との関係も深い。「オツクネ」とは麻糸の玉のことだが、山姥が作ったそれは使つても使つてもなくならない宝であつた話が、「山の人生」(『全集3』五四一頁)に記されている。謡曲の女が麻糸を紡いでいることは、かねてより流通していた山姥像の反映でもあるのだ。山姥と織維の関わりについては、「山島民譚集」のほうに詳しいので、おいおい別稿で考えたい。

ここは前半の見せ場だ。シテ(老女)は、地謡と掛け合いながら、「糸尽くし」^{一四}の嘆き節でこのように歌う。

〔地〕^{一五}「人さらに若きことなし 終には老いとなるものを かほどはかなき夢の世を などや厭はざるわれながら 徒なる心こそ 恨みてもかひなかりけれ

〔ロンギ〕^{一六}(地)「さてそも五条あたりにて 夕顔の宿を尋ねしは (シテ)「日影の糸の冠着し それは名高き人やらん (地)「賀茂の御生に飾りしは (シテ)「糸毛の車とこそ聞け (地)「糸桜 色も盛りに咲く頃は (シテ)「くくる人多き春の暮 (地)「穂に出づる秋の糸薄 (シテ)「月によるをや待ちぬらん (地)「今はた賤が繰る糸の (シテ)「長き命のつれなさを (地)「長き命のつれなさを 思ひあかしの浦千鳥音をのみひとり泣き明かす 音をのみひとり泣き明かす」

〔謡曲集 上〕一七〇(一頁)

〔試訳〕^{一八}人は若いままではいられない。どうせ老いるのだから。こんな儚い夢みたいな世を、なんで捨てずにおられようか。気まぐれなもの思いを、恨んだってしょうがないが。

さてそもそも、都の五条あたりで、夕顔を訪ねたのは、きれいな糸緒の冠をかぶった、あの名高い人(光源氏)だろう。(薬上と六条御息所がやり合った)賀茂神社の祭りで飾ったのは、糸色の美しい牛車だと聞いたつけ。糸みたいに枝垂れた桜が咲きほころぶ頃は、来る人も糸繰る人も数多の春の終わりで。秋ならば、薄の穂すじが垂れて。月光でそれを燃るなら、夜がやって来るだろう。今や機しごとの賤しい女が紡ぐ糸のように、こんなに長く生き果てて。長すぎてつれなくて。一晚じゅう思い明かして。明石の浦に飛ぶ千鳥みたいに、声はり上げて泣くんだよ、ひとりぼっちで泣くのだよ」

つまり、時を操る道具にも見立てられる糸車を回しながら一九、源氏物語を折り込みつつもの思いするこの一節は、装飾的レトリックで無常を歌うただの嘆き節ではないのではないか。並外れた含蓄の主張だろうと思う。柳田の論を援用するなら、(実年齢はさておき)光源氏の時世を踏まえられくらしいじぶんが老いていること、桁違いの年齢であることを、謡曲という物語世界の内側で仄めかしているのではないだろうか。ましてや後半で閨(ねや)のなかを暴かれてのちは、僧を喰わんと襲いかかる異形の女だ。

その昔の都や明石についてこのように吐露しているのだから、八百比丘尼たちと同じような流れ者、歩き巫女の素性も臭う。源氏の一場を相手に聞かせることじたい、かつては京の民であったことの仄めかしに感じる^{二〇}。

^{一四} ふんだんに糸が盛り込まれた修辭。

^{一五} 地謡

^{一六} シテと地謡が「ロンギ(論議)」するように、つまり掛け合いながら歌うこと。

^{一七} 謡曲集 上(新潮社、一九八三年)

^{一八} 「糸尽くし」には掛け言葉も多く、できる限り生かして訳してみた。古文に強いわけではないので、間違ひ等ご教示ください。

^{一九} 『遠野物語拾遺』九〇番には、座敷童子が糸車をまわす音が聞こえる話が載る。この道具には靈妙さも添いやすいのだろう。

「人里遠きこの野辺の 松風烈しく吹き荒れて」と謡曲で描写される「安達ヶ原」。柳田國男著『山の人生』から思い描くならば、たしかにそこは世間からはるか隔たった陸奥山中の荒れ野。そして、かつては都にもいた遍歴の巫女風情の女がいつしか狂って、じぶんはあまりにも長く生きた山姥だと訴えつつ、ひとりきりであばら屋に住んでいる。そんな風景が浮かんでくる。

(四) 野生の女

むろん、なかが正しいかという問題ではない。山姥、鬼女という存在あるいは表象が抱擁する世界はかくも広大で多彩なのだと思う。まるで万華鏡のように。本稿で詳述はしないが、山姥はそもそも山の神であること、それは福をもたらす存在でもあることも関係させながら、ともあれ柳田國男は力強くこう記す。

「山姥山姥は里に住む人々が、もと若干の尊敬を以て付与した美称でもあつて、或はさう呼ばれてもよい不思議なる女性が、曾て諸処の深山に居たことだけは、略疑を容れざる日本の現実であつた」(『全集3』五五三頁)

山姥はいた、それは疑いない現実であつたと三。そして、獵奇趣味に偏りがちな傾向を指して、「之(新井註、山姥)に関する近世の記録と口承とは、甚だしく不精確であつたが故に、最も細心の注意を以て、その誤解誇張を弁別する必要がある」(同頁)と添える。『山の人生』は、山姥の子さらいや狼との重なりも言及してはいるが、その実在を強く主張する柳田は、山姥の鬼性、人喰い性を強調しない。

さらに、そのような女は、成人後の狂気などがきつかけで出奔したり山男にさらわれたりした場合のみならず、「最初から山で生れたかと思はれる山女も往々にして人の目に触れた」(同頁)

と書く。熊野の山中には野猪を追いかける裸形の女がいたり、土佐の山では両眼が鏡のように光る赤髪の女がいたりしたことが文書に残っているという。いや、その類いの伝承は各地にあるそうで、髪長く、総じて大柄であることなどは共通するという。つまり、真正正銘の「野生の女」もいたようなのである。

これについては、『山の人生』に収録されてはいるものの別考の「山人考」で柳田は深めている。その論考が抱える視線は、謡曲にこたえて二本松の観世寺が設えた品々の謎にも繋がりがそうな……。それは次号に。

^{二〇} 前回書いた通り、江戸期には人形浄瑠璃で「安達原／黒塚」は描き直されるが、そこでこの女はかつて京都で貴人の乳母だった設定となる。またこれも書いたが、二本松駅から観世寺へ向かう途中、タクシー運転手のおじさんは、あの鬼婆は地元民じゃないから残酷なんだと言わんばかりだった。その通りになってきた。

^三 わが祖母は、勝手口を訪れる物売りさんからはばしは魚や豆腐を買っていたが、あるとき、ふだんは見かけないが、祖母とは旧知らしい年嵩の男から竹細工の籠を買っていた。柳田の論考に照らすと、もしや山の民の末裔であつたかと思う。